

# 文語の苑

メールマガジン第三十四号(平成二十六年四月)

小倉百人一首 藤原定頼

朝ぼらけ宇治の川霧たえだえに あらはれ渡る瀬々の網代木

京の南の宇治のあたりは、山が深く、今もさ(そ)うのや(よ)うですが、この歌が詠まれた頃、秋から冬にかけての朝には、霧のかかることが多い土地でした。冬の朝早く、まだ夜が明けたばかりの時刻、宇治川の川面に立ち籠める霧が、日が昇るにつれ、少しずつ晴れて途切れ途切れになり、霧の晴れた合間から、川の瀬に立ててある網代木、つまり氷魚(ひお)といふ(う)鮎の一種を採る網を渡すための杣(くひ)が、現れ出て来る。そんな色彩のない、墨繪のや(よ)うな情景が、眼前に浮び上って来ます。地味ではありますが、なかなかよい歌ではないでせ(しよ)うか。

人はこの歌から、源氏物語の宇治十帖を聯想するや(よ)うです。確かにこの歌には、光源氏といふ(う)太陽のや(よ)うな存在が姿を隠した後の、光源氏の因縁の子、薫たちの通ふ山道に霧が立ち籠め、どこからか微光が差して来る宇治十帖の世界を、思は(わ)せるものがあります。霧の中から、次々と現れて来る網代木を、宇治の八の宮、その娘君の大きい君と中の君、更には妹の浮舟などの陰翳の濃い人たちが、物語に登場して来る様になぞらへ(え)て見るのも、興あることでせ(しよ)う。宇治十帖には、宇治の深い霧や、宇治川の網代によって魚を漁る情景も書かれて居ります。

しかし私には、古今集の春風駘蕩たる歌から、藤原道長時代の王朝文化全盛期を過ぎて、この歌のや(よ)うな、もの寂しい、墨繪風の歌に變る、日本の和歌の歌風の推移に興味があります。日本の和歌の最高峰は、平安時代中期の古今集から、鎌倉時代の新古今集までの八代の勅撰和歌集、即ち八代集です。この歌は、その中で第七番の千載和歌集に収録されて居ります。八代の和歌集の中でも、後半の四代の和歌集は歌風が變り、この歌のや(よ)うな地味で、しみじみとした叙景歌が多くなります。

この歌の作者、藤原定頼の父は、大納言藤原公任です。藤原道長の時代に「四納言」と呼ばれた、道長に近い四人の有力者の一人でした。藤原公任は、紫式部や清少納言等の女房たちが絢爛の才を誇る中で、男の學識第一人者でした。自己顕示欲が強く、我儘な人ではありましたが、『和漢朗詠集』の編者、三十六歌仙の撰者で、歌論の權威でした。ある時藤原道長が、京の西の大堰川に、作文(さくもん、漢詩)の船、管弦の船、和歌の船の三隻を浮かべ、それぞれに秀でた人を船に乗せて技を競は(わ)せた時、公任は道長からどの船に乗るかを問は(わ)れて、「三船の才」を謳は(わ)れます。この時は、和歌の船に乗り、詠んだ歌を稱讚されました。但しこの人の百人一首に採られた歌、京都嵯峨野大覺寺の、水の涸れた瀧を詠んだ「瀧の音はたえて久しくなりぬれど名こそ流れてなほ聞こえけれ」は、技巧だけが目立つ平凡な歌です。子の藤原定頼は、父ほどの學識はありませんが、歌は、父より上かも知れませんが、ただしこの人の人柄は、歌のしつとりした趣と大分違ひ(い)ます。小式部内侍にからかひ(い)掛けて、逃げ出したり、おつちよこちよいで、輕率なところがあります。しかもずぼらで、宮廷人としての評判は、芳しくなかったや(よ)うです。紫式部日記によれば、藤原公任は、源氏物語を早くから読んでゐ(い)たや(よ)うですから、定頼も、子供のころから宇治十帖に親しんでゐ(い)たでせ(しよ)う。

# 文語の苑

メールマガジン第三十四号

神のみ民とあるが樂しさ 愛國百人一首を讀む

かけまくも綾に畏きすめらぎの神のみ民とあるが樂しさ 栗田土滿

申すも恐れ多いことながら神代から傳はる皇御國の一員として生れ育つたのは何と楽しいことであらうか

「かけまくも」は心や言葉にかけるといふ意味の下二段動詞「懸く」の未然形「かけ」に、この場合意志の助動詞「む」が接續した「かけむ」を更にク語法で名詞化して、「言葉にかけようと思ふこと」の意になります。これに係助詞「も」により、「綾に畏き」程度が大きいことを類推させてゐます。

ところでこの初句の「かけまくも」から四句目の「神の」まで全く同じ歌が大伴家持の長歌にあるのです（萬葉集卷十八）。何故そんなことになつたのでせうか。その理由を明らかにするため、件の長歌を讀んで見ませう。

かけまくも あやに恐し 皇祖の 神の大御代に 田道間守 常世に渡り 八矛持ち 參り出來し時 時じくのかくの木の實を 恐くも 残したまへれ 國も狹に 生ひ立ち榮え 春されば 孫枝萌いつつ ほととぎす 鳴く五月には 初花を 枝に手折りて 娘子らに つとも遣りみ 白たへの 袖にも扱入れ かくはしみ 置きて枯らしみ 落ゆる實は 玉に貫きつつ 手に巻きて 見れども飽かず 秋づけば しぐれの雨降り あしひきの 山の木末は 紅に にはひ散れども 橋の 成れるその實は ひた照りに いや見が欲しく み雪降る 冬に至れば 霜置けども その葉も枯れず 常磐なす いやさかばえに しかれこそ 神の御代より よろしなへこの橋を 時じくのかくの木の實と 名づけけらしも

「この長歌は題名を橋の歌といひ、第十一代垂仁天皇の九十年三宅連の祖、田道間守を常世國に「非時の香葉」を求めて遣はしますが、十年後漸く纒八纒、矛八矛ともこれを持ち歸つた時、既にその前年 垂仁天皇は崩御なされをり、田道間守は悲嘆の餘りその陵に參つて使命の達成を報告した後叫び哭いて自ら命を絶ち、群臣はこれを聞いて皆涙したといひます。しかし「時じくのかくの木の實」は今に言ふ橋として残り、國中に生ひ茂り、その枝、花や實、更にはその葉までもが愛されてゐることを詠つてゐます。

國學者でもあつた栗田土滿が、記・紀にも記された田道間守の事蹟を詠つた大伴家持のこの長歌に、時じくのかくの木の實をめぐる愛しくも美しい君臣の關係を讀取り、感動したからこそ、この歌の冒頭をその儘取り、自らも同じ皇御國に生れ育つたことを嬉しんで詠つたに違ひありません。後半が前回の高山彦九郎の歌の下の句「玉のみ聲のかゝる嬉しさ」と同じ聲調で共通してゐるのも、眞の「愛國」を詠じてゐるからでせう。

市川浩

# 文語の苑

メールマガジン第三十四号

## 文語唱歌「舟子」

一 やよふな子。漕げ船を。  
漕げよ こげよ。漕げよ こげよ。  
やよふな子。

二 潮満ちて、風凪ぎぬ。  
漕げよ こげよ。漕げよ こげよ。  
やよふな子。

「やよ」は呼掛けの言葉。すでに新古今和歌集にて使はる。天台座主慈圓の和歌、次の通り。

やよ時雨物思ふ袖のなかりせば木の葉ののちに何を染めまし

これだけの歌なれど、「マザーグース」よりとりたる翻譯唱歌なり。ライトなる人が四部合唱、それも同じき旋律を各聲部がおきて順次二歌ひつぐ輪唱用に作曲したるもの故、譯されたるこの日本曲も輪唱にて歌ひて樂しまる。

原詩は日本でもかなり知られたる次の歌なり。

Row, row, row your boat / Gently down the stream.  
Merrily, merrily, merrily, / Life is but a dream.

Row, row, row your boat / Gently to and fro.  
Merrily, merrily, merrily, / down the stream we go.

Row, row, row your boat / Gently down the stream.  
If you see a crocodile, / Don't forget to scream.

日本人には苦手なる「r」の音多くて、しかしいかにも水のつゝを滑りゆくがごとき感覺生まるる歌なるが、里美義の譯は「げ、ぎ」の濁音多ければ滑らかさ缺く。

更に原詩にある「人の世は一場の夢」を缺くが残念なり。

英國の國運隆盛とともに世界中に廣まりたる「マザーグース Mother Goose」は英國の傳承唱歌乃至童謡なるも、元はフランスの童話作家ペローの本の中にありたる「マメール・ロワ」に由來せる譯語なる由。日本では早く明治の初期に譯され、本唱歌は明治十七年の譯なり。大正に入りて北原白秋「まざあ・ぐうす」の譯本を上梓したり。中に「ロンドン橋」はあれど、この「舟子」はなし。餘談にわたれど、白秋が「まざー・ぐうす」中に「數學」なる譯出あり。いかが思はるゝや。

掛け算はしちめんだう、ノ割り算は因業こてんじふ  
比例は人なかせ、ノ應用問題氣がちがふ。

谷田貝常夫

# 文語の苑

メールマガジン第三十四号

讃歌一首 をぼのきみにたてまつる

R 研究所、STAP細胞を世に問ふや、ユニットリーダーなりしをぼのきみ、天性の麗質芙蓉の如くなるを以て、天下騒然たり。リケジヨの星と讃へられ、平成日本の女の鑑と崇めらる。

思ひきや、本朝に類(たぐひ)なき幸運なる女性(によしやう)の、僅々一箇月にして、逆境に涙するの人たらんとは。

彼の懿(うるは)しき人は、今、ホテルに籠りて、寸歩も門を出づる能はず、同僚の差し入れにて、花の命を露に託し給ふ。

いたましきかな。

常に友人知人傍らに侍りて、非常のことあるべからずと配慮す。

マスコミの常なれども、かくも褒め稱へ奉りし人に、掌(たなごころ)を反(かへ)して、罵詈雑言を浴(あび)するとは、その卑しむべき心底、悲憤に堪へず。

模擬裁判なるを知り給ふや。

犯罪者を想定し、學生に、裁判官、辯護人、検察官の役を振り當て、判決を出さしむる。被告人席には、想定せられたる被告人の寫眞を供ふ。

而して、被告人、女性(によしやう)なる場合に、その容姿の美醜に仍(よ)りて、判決に輕重ありやなしやを覗ふ機會にてもあり。裁判官の私情、判決にいかなる影響を及ぼすかの問題ありて、刑法・刑事訴訟法の學者の關心を引くあり。

已而(すでに)して、數多(あまた)の模擬裁判ありて、寫眞の被告人、佳人なれば、寛刑(くわんけい)の判決出づること多しとは、知る人ぞ知る人情の機微なり。

然るに、興味深きは、容色優れたるがゆゑに、却つて嚴刑を課せらるる罪もありとの由。すなはち、「詐欺罪」に於てのみは、美女は他の被告人に比して、重き罰を加へらるとの統計あり。美女の詐欺罪を犯したる、一に、其の美貌を濫用したるの印象あり。學生裁判官、かくの如きは以て正義に背馳するや甚だしと罵すならん。

佳人は世を騒がせたりとも、同情を集むるが常なるに、いまだ刑法にて處分せらるるに至らざる人の、かくもマスコミより指彈せらるるは、男を惑はせたる罪なるによりてなり。

小保の君の上司、三人話題に上る。ハーバード大學のA教授およびR研究所にて其の指導に任じたるB氏とC氏なり。

B氏は、夙(つと)に論文の取り下げを主張せしかども、C氏は躊躇あるが如し。米人A教授に至りては、三月末に及びても、なほ、STAP細胞を作成するを得たりと嘯く。

雑誌の報道に徴すれば、をぼの君は猛獸猛禽の徒(ともがら)にして、あるいは、いづれかの上司(複數)を既に啖(くら)ひたりとの噂頻りなり。啖はれたる上司の、君を擁護せんと盡力する、豈に怪しむべけんや。

人をして魂を銷(け)さしむる絶代の傾國、これ、殷の紂王(ちつわう)を惑はせし妲己(だつき)の、三千星霜を経て、本朝に轉生(てんしやう)したるに相違なし。あまつさへ、その豊滿なる胸を白きセーターにて際立たせ(疑ふらくは是、惱撫裸ならんかと)、「せんせ。お食事に行きませう」と誘(いざな)ふ。誰か能くその蠱惑を斥けん。

否、ひとりB氏は、これを斥けたりとの由。而して、事此處に至りてなほ失意の人を辯護するあり。ああ、眞の男兒なるかな。

# 文語の苑

メールマガジン第三十四号

いづれもいづれも、世に聞ゆる碩學、斯界の泰斗たり。已哉(やんぬるかな)、時は澆季(ぎやつき)に及び、道は塗炭(とたん)に墮ちぬる平成の世、謹嚴なる學者に思ひを寄する女性は曉天の星に過ぎず。碩學、必ずしも艶福にはあらずして、美女の前に出づれば、蛇に睨まれたる蛙の如し。

片や、星の瞳の麗人は、自ら嘘付き女なるがゆゑに、誠實にして勤勉なる男を啖ひ、骨をしゃぶるを以て愉悅と爲す。かかる大團圓(だいだんえん)を招きたるも、洵(まこと)に宜(むべ)なるかなとぞ首肯せらるる。

象牙の塔に籠りたる學者連、圖らずも天界の人の知己を得、玉容に咫尺(しせき)するの榮(はえ)に浴したり。胸の動悸は早鐘と化して、生ける心地なく、心身を擲(なげう)つて、これが爲に己が生命を獻するに到る。

子曰く「小人罪なし。玉を抱きて罪あり」と。

今、此の爲人(ひととなり)を見て、「佳人罪なし。男近侍して罪あり」といふべきか。

余は一月のSTOP細胞の発表の時より、胡散臭きを感じてありしに、果して、この醜聞の出来(しゆつたい)するを見る。

その後は口を開けば則ち、をぼのきみを誹謗し續けたり。

三月末に至りて、ふと「なにゆゑにこの事件のかくも面白き」と自問自答するありて、ハッと覺醒せり。

餘(よ)にもあらず。我すでにをぼの君ゆゑに戀に陥りたるなり。

流言蜚語の的となりたる學者は、おほかた知天命(ちてんめい)、甚だしきは還曆(えんれき)に垂(なんな)んとして、かかる佳人に遭遇し、昵懇(ちつこん)の誼(よしみ)を結ぶに至る。ああ、晩節を汚し、萬座の中に嘲謔(てうぎやく)せらるる無間地獄にこそ墮ちたれ、男子の本懐(ほんくわい)に過ぐるあらんや。寧ろ羨望(せんぼう)の念ひに堪へざるなり。

臣のゆゑなくして天女を中傷し奉りし、眞實、慙愧の念に耐へず。叩頭して罪を謝す。

ああ、をぼの御方。君は最早科學界に戻るを得給はざらん。然りと雖も、身より出でたる鏑と御自ら責を負ひ給ふなかれ。天女の玉體、焉(いづく)にか鏑の生ずべけん。

をぼの方に、一面を犯して忠言を仕まつる。君、盍(なん)ぞ藝能界へ轉身し給はざる。

時恰も、AKB Forty-eightは「年上メンバー」を募集せんと畫してあり。願はくは、金枝玉葉の尊き御身を秋葉原へ運ばせ、これに應募し給はんことを。御齡(おんよはひ)三十路に餘らせ給ふといへども、なほ雪の膚、花の顔(かんはせ)、protruding breasts、舞臺に渡らせたまふには、スーパースターと讃へられんこと必定(ひつじやう)なり。

奴(やつこ)、些かの衷情を以て、解語の花の御爲に身を挺せんと欲す。

高田友

# 文語の苑

メールマガジン第三十四号

## 巴里のビストロ(一)

(注記) 飽くまでも二十年前(平成五年)の手記をもとにして、その文語化を試みたるものなれば、最新情報には非ざる点、留意せられたし。

### MOISSONNIER(モワソニエ)

五区。数種類のガイド書にて常にビストロ上位に位置づけらるる名店なり。常連客、上座を占む。リヨン風の料理、美味なり。

### LA TOUR DE MONTLHERY(ラ・トゥール・ド・モンレリー)

一区。部屋の調度品、天井の緩慢に回る扇風機、レトロの雰囲気格別なり。席に着けば、直ちにラベル無きワインのボトル、ドンと卓上に置かる。常連客すべて体型太りたるは、料理の量多き故か。味は昔も今も變はらざらむ。卵のジュレ、肉の串刺し、デザートのパバなどいと言し。

### LESCURE(レスキュール)

一区、コンコルド広場の脇道にあり。隣の客と腕の接する近さにて、いかにもビストロらしき雰囲気ふんだんにあり。ランチは九十八フランにてワインのハーフボトル付きなれば、費用対効果よし。味良く、サービスはプロの仕事と見たり。或る日のメニューは、鯖、ブルギニオン、クレームキャラメル。満員のときには、行列を待つ人にサラミの一片の特別サービスあるも嬉し。常に満足して歸ること必定なる名店なり。

### L'IMPASSE(ランパス)

四区。人参とシャンピニオンのサラダ、ドレッシングも含めパリのサラダとして出色のものなり。夜は雰囲気は一變し、英語を話す客多し。東洋人の女性によるサービスは珍し。

### LA GRILLE(ラ・グリーユ)

十区。客筋良く、料理も肉料理など至極美味なりき。

### LE BISTRO DE L'ETOILE LAURISTON(ル・ビストロ・ド・レトワール ローリストン)

十六区。二つ星シユフのギ・サヴォア氏傘下のビストロの中にては最も新しき店なり。客層は若く、トレンディなる雰囲気は時代の最先端を行く感あり。メニューには一品毎に詳しく説明あり。スープは殊の外美味なり。

### LA ROTISSERIE D'EN FACE(ラ・ロティスリー・ダンファス)

六区。二つ星シエフのジャック・カーニヤ氏傘下のビストロ。若き従業員たち、生き生きと立ち働くさまを見るは清々し。定食は百七十五フランにて、或る日はアヴォカドと小エビの前菜、伝統料理のアンドワイエット、シヨコラのムース。

### LA ROTISSERIE DU BAUJOLAIS(ラ・ロティスリー・デュ・ボージョレ)

五区。三ツ星、トゥール・ダルジャンを經營するテライユ氏の店にて、場所もすぐ隣に位置す。得意の肉料理主体なり。中の上程度か。

# 文語の苑

メールマガジン第三十四号

CHEZ LA VIEILLE (シェ・ラ・ヴィエイユ)

一区。昼しか開かぬランチ専門店なり。定食は無く、決して安価にはあらず。予約は困難なる店として有名。七十フランの前菜、その日には、テリーヌ、兔のリエット、トマトファルシの三種を貰ふ。店の場所目立たず、道を通り過ぐる懼れあり。かくなる場所にかくなる店存すとは信ぜられき。

L'AMI LOUIS (ラミ・ルイ)

名物の爺さん亡くなりても、雰囲気・味は一応維持せられたる様子と見受けたり。タイユヴァン並みに高価なれど、訪ふ価値はあり。フォアグラ、一人前三切れは圧巻なり。ペルドロ(山鶉の一歳以下の若鳥)は他店のものを凌ぐ。

LA POULE AU POT (ラ・プール・オー・ポ)

一区。夜のみ店を開く。天井の扇風機、テーブル上の蝋燭、客を和ます雰囲気は独特。店の名前にもなりたる料理、『丸ごとの鶏肉の赤ワイン煮』の大きな壺、優に一人前はあり。

土屋博

# 文語の苑

メールマガジン第三十四号

## 女性と職業

日本において半世紀前までは、女性の職業に就きて働くと言ふはまれな事なりき。米国の首都ワシントン在住中、十六歳になりし吾に父「将来、教育は男女平等となり、結婚は女性にとりて最終就職にはあらず、男性に列して職業に就く時代到来するならん。よいて、心して勉学に励み、立派な社会人となるべく気構へ整へつつ日常を送るべし」と言ひき。お転婆な吾、静かに本を読むは好みにあらず、更には職業を持つといふ事良く理解する能はざりき。ただ、その頃、外務省の若き青年たちそれぞれの留学先大学にて知り合ひし日本女性伴ひて、我が家に時々食事を訪れたり。非常に聡明なりし先輩女性たちを見るに、なるほどいづれ就職するため大学にて勉強すれば自信に溢れ、自分の意見はつきり表明し、立ち居振る舞ひ凛としたる女性に成長するならん、なかなか良き姿なりと思ひき。吾も米国のエスタブリッシュメント多く排出せるアイビーリーグの大学を目指し、勉学に励む。遺憾にして娘二人に留学の機会を与ふるほど我が家は富裕にはあざりき。

十八歳にて米国の高校卒業し帰国せし吾に、父「これからの時代、英語普通に駆使する人たち増ゆ。女性として仕事する上にて、男女差別最小限にとどめらるる仕事はと考ふれば、免許有する、弁護士、医師、公認会計士等最適なり。海外にて殆ど教育を受けし君は、日本の試験合格するは至難の業なり。さりとてその当時、海外にて就職せんも難かるべし。よいて、人より抜きんづる英語能力にて勝負する外なし。但し、英語のみにては足りぬ故、とりあへず、未だ熟練するもの少なき英文速記やタイプなど大留学中に免状取すべし」と助言せり。父曰く、その当時日本においては国際会議少なく、英文速記者殆どをらず（僅か四名）、また通訳者になるにも役立つゆゑ。

上智大学に通ふ一方にて、英文速記上級やタイプ（一分につき百五十文字）等最優秀の成績にて修了証書を得たり。偏へにそのゆゑを以てか、その当時の大卒の初任給は四万五千円に比し、その倍以上の十萬円の給料にて国際機関の出先事務所に就職する事になりき。仕事を變はるたび、より高き能力發揮する仕事に就きたり。

その過程において、自分の役割は海外との懸け橋になることならむと考へ始めたり。その頃、朝日新聞の東京本社への就職決まり、一年に満たざる総務職勤務の後、現在の国際本部の前身、編集局国際配信部なる部署にて英語の記事執筆する記者となり、正に日本の政治・経済・文化などを海外向けに発信する仕事に就きたり。その部署において書かれ、また英訳せられたる記事はニューヨークタイムズ配信網によりて世界中に配られたり。

一九八〇年代後半半日本の金融制度改革始まり、諸外国より日本の慣習、および行政指導なるもの分かり難く非関税障壁なりとの批判多く、女性の友人たちと共に日本の制度説明する金融ニュースレターなるものを発行する会社立ち上げたり。その二年後日本経済新聞参入し、将来危ふからんと思ひて、廃刊するに至れり。それ以降は経済関係の大きな国際会議など運営するビジネスに切り替へたり。その過程に於て、女性の翻訳者や通訳者の数、男性を圧倒的に上回ることに認識したり。今日にては女性も大臣に任命せられ、大手企業役員にも登用せらるる時代になりき。吾ら働き始めた時にはそれら全て遠き道のりの如くに思ひたり。将来は更なる変貌を遂ぐるならんとの期待強く持ちたり。人生全てにおいて、父の幅広き視野とビジョンおよび助言なかりせば、今日の吾はなかるべしとぞ思はるる。

赤谷慶子



# 文語の苑

メールマガジン第三十四号

## 酵素ジュース

酵素ジュースを作る會に参加す。

当日は明方より可也の積雪にて各交通機關に影響及びぬ。されど我最寄駅は横濱市營地下鐵なれば、幸ひほゞ平常通りの運行との由。開始一時間前には確認の為教室に連絡を取り、豫定通り決行との回答を得たり。

雪道をビニールの雨靴にて歩き始めた所、数十メートルにて靴の中水浸しとなりぬ。一旦自宅へ戻り、ゴムの長靴に履き替へ、再出發せり。

會場は一駅隣の小洒落たる家具店兼レストランなり。講師は自然食品を扱ふ若き青果商なり。開始時刻になりても到着せぬ人数あり。待ち時間を使ひて講師の作成せし酵素ジュースを味はへり。柑橘系、ベリー系、野菜系等の酵素ジュースを炭酸水または白湯にて割りて試飲す。中々美味なり。酵素は熱に弱き物なれば、無糖の炭酸水にて割るを良しとす。季節柄温かく飲用せんと欲する場合には、七十度以下にて酵素の効果を損はざるが良しとの事なり。

先づ手を良く洗ふ。石鹼は使はず。手に付着せる酵素を除去せざるが為なり。本日の材料は二種の柑橘及び砂糖なり。伊予柑と奄美蜜柑を包丁にて輪切りにし、更に其を半分に切れり。砂糖は黍から取りし茶色き物なり。用意されし廣口壺を布巾にて拭けり。

砂糖を廣口壺の底に二センチ程の厚さに敷き、其の上に柑橘類を入れ、砂糖、柑橘類砂糖と交互に入るれば幾層かを為し、最後に最上層を砂糖にて覆ふなり。他には何も加へず。之にて作業は終了なり。誠に簡單なり。

是を、毎日一度、良く掻き混ざるなり。約一週間も経たば泡發生す。發酵なり。講師の曰く、「納豆をば食せし直後には掻き混ざる事無かれ。納豆菌は酵母よりも強き物なり。」

また曰く、「長く置かば酢になる事も有り。其は酢として愉しまれたし。」

余、尋ねて曰く、「酒になる事も有らんや」「然も有るなり。」

余の酵素ジュース、以来数週間を経ぬ。酢にも酒にもならず、順調に發酵中なり。猶、参加者十数名中、男性は小生只一人なり。

仲紀久郎